

タイトル	古典古代とプラトン
著者	小林，淑憲；KOBAYASHI，Yoshinori
引用	季刊北海学園大学経済論集，67(1)：37-48
発行日	2019-06-30

《研究ノート》

古典古代とプラトン

小 林 淑 憲

古典古代の思想

ヨーロッパ思想には、古典古代の思想とキリスト教思想という2つの源流・淵源がある。この2つの源流・淵源のうちの1つ、ギリシア・ローマ時代の思想（古典古代の思想）についてまず概観する。ヨーロッパ思想の源流・淵源という言葉の意味は、ヨーロッパの長い歴史において、あらゆる思想家がこの2つの思想のそれぞれに対して、批判するにせよ受け容れるにせよ、大きな関心を払わざるを得なかったということである。人間は、無から何かを生ずることはできず、どんなに革新的な発明でも、必ずそれに先行する蓄積を前提としている。それは思想においても同じことで、どんなに天才的な思想家であっても、彼より以前に生きた思想家たちの思想を消化し、批判することなしに独自性を持った思想を展開することはできない。言い換えると、後世の思想家は自分が直面する思想的・歴史的課題を解決しようとするときに、古典古代の思想家の権威を借りたり、場合によっては断りなしに借用するということがあった。この意味で、ヨーロッパ思想において特に重要だったのが、プラトンやアリストテレス、キケローなどの古典古代の思想家と、イエスの言葉が記されたとされる聖書だった。したがって古典古代と原始キリスト教とは、ヨーロッパの全ての思想家の背骨あるいは土台として、最も基礎を形作るものであった。

この古典古代という言葉は、ペルシア帝国に代表されるオリエント、東方の世界に対して、ギリシア・ローマ（オキシデント、西方）の世界を指す言葉である（福田敏一『政治学史』第1章序節）。西洋人たちは、今日でも、自分たちの文明・文化の基礎はこの世界にあって、自分たちはこの基礎の上に長い歴史を築いていると信じている。したがって、近現代の思想家もそうした古典古代の思想を継承・批判しながら自分の思想を育んでいる。

ここからは西洋の社会思想史を概観する上で、古典古代の中でも特に外すことができない思想家たち、具体的には、プラトン、アリストテレス、ストア派などを取りあげる。よく知られていることであるが、20世紀イギリス生まれのアメリカの哲学者ホワイトヘッドは、「ヨーロッパの哲学的伝統のもっとも安全な一般的性格づけは、それがプラトンについての一連の脚注からなっているということである」と指摘した（ホワイトヘッド『過程と實在』2部1章1節）。それほど後世の思想家たちはプラトンの存在を意識し、彼の問題提起を深刻に受け止めたのである。そのプラトンの社会思想を検討する前に、古代ギリシアの歴史的状況について述べておく。

古代ギリシアの政治と社会

古代のギリシア人が自分たちの政治や社会の特質を自覚したのは、オリエント、特にペルシア帝国との比較においてであった。ペルシア戦争を経験した後、そうした傾向は顕著になったという。トゥキディデスとともに「歴史記述の祖」と呼ばれるヘロドトスは、『歴史』において、スキタイ人やエジプト人などの特異な風習と並んで、ペルシア人の習俗についても詳細に検討し、横暴な支配者の姿を描写している（ヘロドトス『歴史』巻1～巻4）。古代ギリシア人たちがペルシアの政治と社会に見出した特徴は、人々が恐怖と鞭に追い立てられて、一人の人間に服従する政治・社会体制であった。それは後世モンテスキューが『法の精神』で描いた専制のイメージ、すなわち一人の主人が他の人間を奴隷として恣意的に支配する状態である（モンテスキュー『法の精神』2編5章、3編9章）。

これに対して、古代ギリシア人たちは、自分たちの政治や社会の特質として全く異なる特徴を見出した。国家共同体すなわちポリスは政治社会の一個の単位である。現在のギリシアとその周辺に数百のポリスが散在していた。その人口は数千から数万と考えられている。私たちは国家といえれば一定の領土を前提とする共同体を想像するが、当時の人々のイメージするポリスは領域国家に限らず、市民団そのものを意味する場合もある。

ポリスを構成するのは市民であるが、市民とは政治と裁判にあずかる成年男子からなる特権階層である。領域国家としてのポリスには女性も劣格市民も在留外国人も奴隷も居住していたが、彼らには参政権はなかった。重要なのは、ギリシアはペルシアと異なって、市民たちが市民総会（民会）に参加して発言したり一票を投じたりし、また同じ法に服従していた点である。

市民総会は、市民たちが集まって話をする広場（アゴラ）で、ポリス全体にかかわる事柄を決めていた。人々が公共の事柄を皆で議論して決定していた。アゴラの周りには市街地が取り囲み、その周りを今度は田園が取り囲んでいた。ギリシア人たちは、このポリスを、法の下に団結した自由人たちの人的共同体としてイメージした。したがって、古代ギリシアにおいては、支配服従関係がポリスを前提とし、法に則したものであって、ペルシアのように決して一人の人間に服従することが全てではなかった。ペルシアでは、一人の人間だけが自由であるのに対して、ギリシアにおいては、確かに戦争捕虜とか債務を負って奴隷に転落した者がいて、彼らは家内奴隷だったり、富裕な市民の経営する銀山での生産労働に従事していたりしていたが、一部の自由な複数の人間がポリスを形成していたのである（周藤芳幸、村田奈々子『ギリシアを知る事典』）。

複数の主体によって構成され、運営されるポリスは、それ自体にとって利益となる事柄、つまり「公共善」という観念を人々の間に生み出す。そして自由な市民にとって最大の関心事は、ポリスにおいて活躍し、公共善のために一身を捧げることであった。そうした市民を教育し再生産するために、人々は弁舌と説得という方法を重視した。

しかし人間としての理想が、公共善のために貢献することであるとしても、いつも現実の人間がそうした存在であるとは限らない。現実の人間が、名誉心や支配欲といった個人的な欲求に駆られて、公共善をなおざりにすることで、ポリスを危機に陥れるということもある。そして実際にアテナイがペロポネソス戦争に敗北した後、僭主の支配する政権が生まれたり（30人僭主政権）、民主政権がソクラテスを処刑したりという危機的な時代を迎えたとき、特にポリスのあり方と、人間の理想とのギャップを強く意識したのがプラトンだった。

プラトン (428/427? -348/347? B.C.) の生涯

紀元前 428 年か 7 年, つまりペロポネソス戦争の最中に, アテナイか, アテナイの南西の海上アイギナ島に生まれた。古代ギリシア人に姓はない。同名の人と区別するためには出身地をつけて呼ぶことがあるが, プラトンは正確な出生地ですら所説あり定まっていない。だが, 母方がソロンの血統に属する名門であることはわかっている。

ディオゲネス・ラエルティオスによれば, プラトンは 20 歳の頃, ソクラテスと出会ったという。悲劇作品を書いて賞を獲得しようとしていたプラトンは, 劇場の前でソクラテスに諷められて作品を火に投じ, それ以後ソクラテスの弟子になったという (ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』3 巻 1 章)。

プラトンは, 上述したようにギリシアのポリスがまさに危機に瀕しつつあるという現状認識からその思想の営みを始めた。彼がアテナイの危機を認識したきっかけの 1 つは, 師匠であるソクラテスが処刑されたことにある。プラトンは若い頃は, ソクラテスの弟子になるとともに, 名門出身としてやがて国事に従事しようと考えていた。近親者や知人にそのような人が多かったからと考えられる。しかし後述するように, プラトンが遺した数少ない手紙の一つ『第七書簡』によれば, 知的にも道徳的にも優れていた師ソクラテスを処刑しなければならないほどに, アテナイをはじめとするポリスの墮落は進んでおり, そのことでプラトンはめまいを催したとあって, それを機会にプラトンはいずれ国政を担う人物になろうという志を放棄した。40 歳頃にアカデメイアに学園を設立した。つまり政治的实践を行わずに, 生涯に亘って青年の教育に携わると同時に多くの哲学書を書き残した。

プラトンは 80 年の生涯のうち, 3 回シケリア島 (第 1 回は南イタリアにも) へ旅行した。このうち南イタリアへ行った際に, ピュタゴラス学派の人々と交流した。ピュタゴラス学派の中心人物にアルキュタスという当時第一級の数学者でかつ南イタリア・タレントゥムの優れた政治指導者がいた。再びホワイトヘッドによれば, ピュタゴラス学派はプラトンに「靈感を与えた」(ホワイトヘッド『過程と实在』2 部 2 章 2 節)。つまり, プラトンがその後アカデメイアに学園を設立し, そこで政治指導者を育成するために, 数学を基礎教育に据えたことの大きな理由として, この時のピュタゴラス学派との交流を指摘することができる。

アカデメイアの設立に際しては, シケリアの僭主ディオニシオス 2 世やその叔父に当たるディオオンらによる経済的援助を役立てていたであろうと考えられている。プラトンはソロンの血統につながる名門の出であるが, 経済的には裕福な状態ではなかったと見られ, にもかかわらずプラトンはアカデメイアで授業料を取らなかったといわれる。それは, 同時代のソフィストたちが弁論術 (修辞学) を教えるのに, 特に外国人から個人教授の授業料を取っていたことと対照的である。

名門ではあったが裕福でなかったのに授業料を取らなかったのであれば, どのようにしてプラトンは生計を営んだか。ひとつには裕福な弟子から経済的援助を受けていたようである。当時のギリシアでは, 学者や研究者はその私生活を支える経費を富裕な人々から援助を受けるのは普通のことであったという。またプラトンは果樹園で葡萄やイチジク, てんにんか, オリーブなどの栽培をしエジプトなどと交易していたようである (廣川洋一『プラトンの学園アカデメイア』V 章)。

プラトンの社会思想の動機

このようにプラトンは、若い頃はソクラテスに指導を受け、とりわけソクラテス死後は、アカデメイアで青年を指導するとともに著作活動を継続するという人生を送った。彼の社会思想の形成という点から見た時、重要なのはソクラテスの処刑である。本来、市民とポリスとは一体であるべきなのに、それが崩壊しかかっていること、しかもアテナイの民主政治では、指導者が民衆に迎合した政治を行っていることがソクラテスの処刑から見て取ることができた。『第七書簡』はこのことをよく示している。

「…しかし今度も、何かの巡り合わせから、一部の権力者たちがあの人を、われわれの同志ソクラテスを、全く非道きわまる、誰にもましてソクラテスには似つかわしからぬ罪状を押しつけて、法廷へ引っ張り出す。すなわち、かつて、彼ら自身が亡命の憂き目を見ていた時、亡命中の仲間の一人が非道な仕方では逮捕された際、その連行に手を貸すのを拒否したあの人を、それを、あるいは不敬犯と見て告発し、あるいはこれに有罪の票を投じて、死刑に処するに至ったのです。

で、そういった事件や、国政を実際に行っている者たちのことを観察しているうちに、それも、法律や習慣をより立ち入って考察すればするほど、また年齢を重ねれば重ねるほど、それだけ私には国事を正しい仕方では司ることが、いよいよ困難に思われてきました。というわけは、味方になってくれる者や信頼できる同志を持たないでは、実際行動はできないとも思われたし、—そういう同志が現に存在しているのを見つけることは、当時我が国の政治がもはや父親たちの世代の習俗の下では営まなくなっていたので、容易ではなかったし、また別に新しく同志を作ること、一通りの容易さではできなくなっていました。—それにまた、成文の法律、不文の風習のどちらも、荒廃の一途をたどっていて、その昂進の程度も、啞然とさせられるばかりでした。そういうわけで私は、初めのうちこそ公共の実際活動へのあふれる意欲で胸一杯だったとはいうものの、それら法習の現状に目を向け、それらが支離滅裂に引き回されている有様を見るに及んでは、とうとうめまいがしてきました。それで私は、直接それらについてだけではなく、広く国制全体についても、いったいどうすれば改善されるだろうかと、考察することは中断しはしなかったけれども、しかし実際行動に出るについては、いつも好機を期して、控えているよりほかはなかった。そしてそのあげくには、現今の国家という国家を見て、それらが残らず悪政下に置かれているという事実を、否応なく認識せねばならなかった、—というのは、法習の現状は、どの国にとっても、もはや、何かびっくりするほどの対策と、あわせて幸運をもってしなければ、とうてい治癒されようもないほどになっていたからですが、—そして、それとともに私は、国政にせよ個人生活にせよ、およそその全ての正しいあり方というものは、哲学からでなくしては見極められるものではないと、正しい意味での哲学をたたえながら、言明せざるを得ませんでした。つまり、「正しい意味において、真実に哲学している部類の人たちが、政治上の元首の地位に就くか、それとも、現に国々において権力を持っている部類の人たちが、天与の配分ともいふべき条件に恵まれて、真実に哲学するようになるかの、どちらかが実現されない限り、人類が、禍から免れることはあるまい」と。」(『第七書簡』325B-326B)

このようにプラトンは、ポリスの本来あるべき姿であるところの、「市民とポリスとの一体化」という理想から、アテナイがかけ離れてしまっているという意識を強く持った。そうした理想からの乖離を推し進める役割を果たした人々として、プラトンの念頭にあったのはおそらくソフィストであった。当時のアテナイその他ギリシアには、ゴルギアスとかトラシマコスといった多くの様々なソフィストがいたが、彼らは青年たちに弁論術を授けようと活動していた。弁論術は人々を説得によって動かし、ひいては社会や国家を一定の方向に導くための技術である。プラトンの目からすれば、ソフィストたちのそうした活動はアテナイを危険な方向に導くものであった。それは究極的には衆愚政治やそこから生まれる僭主政治という形を取る。アテナイは市民参加による公共善の実現が理想であるにもかかわらず、実は衆愚政治や僭主政治と隣り合わせていたということである。これがプラトンが独自の社会思想を作り上げる際に、彼の目の前にあった問題

である。そして、アカデメイアで青年の教育を行ったのは、アテナイの将来を背負って立つ哲学者にして政治指導者を育てることであった。アカデメイアでの青年教育は基本的に問答形式であり、この点、アリストテレスのリュケイオンでの講義形式とは異なっていたと考えられている。

魂の不死と想起説

プラトンの思想の根本には想起説という考え方がある。プラトンは人間を含むあらゆる動物の魂が不死であって、あの世からこの世へと循環的に再生することを『メノン』や『パイドン』(70D-72E), 『パイドロス』(245C-246A), 『国家』などにおいて繰り返し述べている。プラトンによれば、例えば政治指導者としての徳つまり、優れた人物が備えるべき、ポリスを正しく導くための思惑は、教師から教えられて身につけるものではない。むしろ、そうした思惑はこの世に生まれる以前に、神の恵みによって備えられていて、学んでしまっている。そして政治指導者はそうした思惑を適切な機会に想起するに過ぎないという(『メノン』96D-100B)。

それでは想起するとはどういうことか。プラトンによれば、ある物とある物が同一の物であると判断する基準を予め持っていない限り、そう判断することはできないはずだという。言い換えれば、等しいということ、等しさの観念(イデア)を人間がもともと持っていないとおかしなことになる。それは等しさだけでなく、「より大きい」ということや「より小さい」ということに関しても同じである。つまり大きいとか小さいということ自体は、予め知っていなければ、2つの物を比較して大小を判断することはできないのだと。

ではそうした等しさの観念や大きさの観念はどうやって身につけるか、つまり学習するかと言えば、想起すなわち思い出す以外にないとプラトンは考える。そして、そうした観念は、ある人が死んでその肉体から切り離された魂が魂の国(冥界、あの世)に一時期とどまって、やがてその魂が別の人間の形を取って生まれ変わってくる。それでその等しさとか大きさとかいうことを想起する必要が生じたときに想起するのであるというようにプラトンは考えるのである(『パイドン』73C-77)。したがって、魂の不死とイデアと想起の3つは互いに切り離して考えることはできない。

イデアについて

プラトンは、政治指導者が本当の正義や善を知って統治を担わなければならないと考えるが、そうした真の正義や真の善は、時や場所によって移ろってはならず、恒常不変のあり方を保つものでなければならない。プラトンはそのような事物の真の姿、事物の本質のことをイデアと呼んだ。

人間の目に見えることがらに関してであれ、見えない事柄に関してであれ、認識の対象は、つねに流転している。例えば授業で配られるプリント類は、授業が終わって単位を取った後も取っておけば、角は丸くなるだろうし、ずっと取っておいたとしても、いずれは茶色く変色して、姿形が変わって行く。しかしプリントという概念そのものは変わらない。このように、もしもあらゆる認識対象に、正確な定義を与えようとすれば、そういう見たり聞いたり味わったりできる感覚的な対象を離れて、確固たる実在を想定しなければならないとプラトンは考える。それがイデアである。

アカデメイアで学ぶ将来の政治指導者たちは、その基礎教育として特に数学を学ぶ。数学で扱う三角形や円は通常、地面や紙の上に書かれ、書かれた図形は真の三角形や真の円ではないが、我々はその書かれた図形を素材として幾何学的な考察を深めていく。その際、私たちが考察するのは紙や地面に書かれた図形そのものではなく、それを通じて思い浮かべられた、つまり想起された完全な「三角形そのもの」や完全な「円そのもの」である。つまり数学は、視覚や触覚などの感覚で捉えられる具体的なものを直接的な対象とするのではなく、それとは別に我々が思い浮かべるものを対象としている。とすると、数学が学問として成立するためには、そうした完全で純粋な事物の世界を想定しなければならないとプラトンは考えて、それをイデアの世界と呼んだ。

そこでプラトンは数学に関する想起の訓練を積んだ政治指導者が、やがて追究すべきイデアとして善のイデアを考える。善のイデアをもっとも重要、究極のイデアと考えている。プラトンの理想政治のことを哲人政治と呼ぶが、その担い手が、この善のイデアを認識でき、それに基づいて国家の政治を運営する時、理想国家が実現するという。ここには、善のイデアという実在があつて、それを想起できる哲人がいて、しかもその善のイデアにしたがって政治を行うことができるという強固な信念を見ることができる。

国家の起源と発展

魂の不死とイデアと想起の 3 つを基礎として、プラトンはどのような国家、社会を理想と考えたのか。国家と市民の一体性をどのようにして確保しようとしたのか、この問題について考えてみよう。プラトンは作品『国家』において、現実には存在しない、理想的な国家を構想し、それを書き残した。プラトンの作品の多くが対話体で書かれているが、この『国家』もそうである。アテナイの港ペライエウス（ピレウス）で女神ベンディスの祭りが行われた後に、ソクラテスがプラトンの二人の兄グラウコンとアデイマントスとその他の人々を連れて、ケパロスの邸宅に行き、そこでトラシユマコスや、リュシアス、クレイトポンなどと会って対話が始められる。この作品の著者はプラトンであるが、彼の他の作品と同様、プラトンは対話に登場しない。そして作品の主人公は「ぼく」つまりソクラテスであつて、ソクラテスが誰かに対話の内容を報告するという形式である。にもかかわらず、本稿ではソクラテスによる発言は全てプラトンの思想を表したものと扱う。

この作品には「正義について」という副題がつけられている。ポリスにおける正義が対話の重要な話題として論じられているのである。まず国家の起源について、それは人間が自給自足することができないことに求められるとプラトンは考える。人間は自分一人では決して自給自足できないので、お互いに依存し合って生活している。互いに不足しているところを補い合って生きている。そのように不足するところ、換言すれば欲望を人間が相互に充足するところに、共同体が生まれる。そこでは衣食住を提供する農夫、大工、織物工、靴職人がいる。一人で多くの様々な仕事をしても良いが、それよりも何人かで仕事を分業した方が、必要な物の必要とされる時期を逃すことがない。しかもそれぞれの仕事には使う道具や、仕事を円滑に行うための協力者が必要で、それを専門で担当する職人、木工や金具職人、さらに羊飼いや牛飼い、小売商人、貿易商人などが必要になる。このようないわば分業論の前提として、人間が生まれつき不平等で仕事の向き不向きがあるという考えがある（『国家』369C-370D）。

プラトンは、人々の物欲が刺激されるような豊かな国家を好ましくないと考えるが、分業が非常に進んだ「贅沢な国家」についても考察する。分業が進んで様々な種類の物が必要になれば、領土の拡大が必要になってくる。隣国においても同様に分業が進めば、隣国もプラトンたちの国家の土地を切り取る必要が生じてくる。つまり戦争が起こりうるということになる。ところが農夫や靴職人がその仕事から解放されて戦争の仕事に専念し全うできるかということそれは不可能である。そこで国家の富の防衛に専念する者つまり軍人（補助者）が必要になる。防衛の任務に適した自然的素質（勇敢さ、気概、敏速さ、体力的強さ）を備えた人々が必要になるという（『国家』372D-375B）。

さらにところが、そうした自然的素質を備えた補助者は、互いにまた他の市民に対して粗暴であってはならないはずだとプラトンは考える。味方に対しては穏やかで敵に対してだけ厳しい人間が必要になる。プラトンはこうした矛盾した性格の人間が存在しうることを、素性の良い犬を例に挙げて論ずる。つまりそういう犬は、良くなれて見知っている人に対しては穏やかであるが、見知らぬ人に対してはその正反対になる。こうして身内の者や知っている者に対しては穏和な人間になるためには、知を愛し学びを愛さねばならないとプラトンはいう。そしてそのような人間が政治指導者として必要だとプラトンは考えるのである。要するに、国家には農商工業者、補助者、「知を愛し学びを愛する」守護者（政治指導者）などの身分、職分を必要とする。プラトンはその次に、「知を愛し学びを愛する」守護者をどのように育成するかに考察を及ぼすが、この点については後述する。

国家における3つの種族と「らしさ」の追求

プラトンは、国家における職業の区別は各人の向き不向きによってなされるべきだと考えるが、正義は自分の仕事にのみ専心し、他人の仕事に手出し口出しをしないことにあると断言している。

「各人は国におけるさまざまな仕事のうちで、その人の生まれつきが本来それにもっとも適しているような仕事を、一人が一つずつ行わなければならないということ…そして自分のことだけをして余計なことに手出しをしないことが正義なのだ」（『国家』433A）

プラトンはこのように例えば靴職人が同時に農夫であろうとしたり、織物工であろうとしたり、大工であろうとしたりすることを許さない。各人の職分を守ることに正義があると見ている。反対に3つの職分の間で余計な手出しや相互的な交換をすることは、国家にとっての最大の害悪であるとする（『国家』434C）。

そして国家内の、農商工業者、補助者、守護者という3つの職分（種族）は、それぞれ「節制」「勇気」「知恵」という3つの徳目を守るべきであるという。プラトンは一国家ではなく一個人における魂の部分として、欲望的部分と気概的部分、理性的部分の3つを挙げ、理性的部分のリードの下にそれぞれが調和均衡を保っているような場合に、一個人において正義が実現されている、つまり正しい人間であるという。このこととの類比によって、一国家においても、一個人の魂の部分に相当する3つの職分がそれぞれの徳目を守っている場合、つまり農商工業者、補助者、守護者のそれぞれがそれらしく振る舞っている時に国家は正しくなると考えている。プラトンの四元徳ということがよくいわれるが、『国家』において、正義は節制や、勇気、知恵とは次

元の異なる概念であることに注意すべきである。

男女平等と共有制

プラトンは、一個人において理性的部分を重視したのと同様に、一国家において守護者つまり政治指導者に重きを置く。言い換えると、プラトンは庶民よりも国家のエリートに関心がある。そもそもアテナイの危機は衆愚と彼らが支持した僭主とによってもたらされたと考えていたのであるから当然と言えば当然である。そのエリートたちはどのような国家生活を営まねばならないか。その大きな特徴は男女平等と共有制にある。

まず男女平等については、教育の内容が際立っている。つまり男子には、音楽・文芸・体育が教えられるのだから、女子にも同じことが教えられるべきであり、補助者の身分についてさえ、体力的な強さ弱さの差を除いては同じように訓練し、同じように扱わなければならないとしている。

「そうとすれば友よ、国を治める上での仕事で、女が女であるが故に特に引き受けねばならず、また男が男であるが故に特に引き受けねばならないような仕事は何もないことになる。むしろどちらの種族 [男女] にも同じように、自然本来の素質としてさまざまなものがばらまかれていて、したがって女は女、男は男で、どちらもそれぞれの自然的素質に応じてどのような仕事にもあずかれるわけであり、ただすべてにつけて女は男よりも弱いというだけなのだ。…むしろ思うに、われわれの主張としては、女にも生まれつき医者に向いている者もあればそうでない者もあり、また音楽に向いている者もあれば不向きな者もあるというのが、実情だと言わなければならないだろうからね。…したがって、国家を守護するという任務に必要な自然的素質そのものは、女のそれも男のそれも同じであるということになる。」(『国家』455D-456A)

プラトンが国を治める仕事を割り振るのに考慮するのは、性差ではない。生来、軍人に向いているかいないかとか、何かを知ることに向いているかいないかとかである。

次に所有については、プラトンの理想国家の守護者たちは私有財産が認められていない。それは、分業によって生活必需品を生産する生産労働に従事する必要がないので、そのかわりに、国を治める仕事に徹底的に奉仕しなければならない、とされていることと非常に関連が深い。私有財産の否認は、無私の献身の問題で国事に携わることの制度的な現れであるといつてよい。守護者は、共同の住居に住んで、庶民から報酬として受け取った食料を共同の食卓で食べる、という生活をするものとされている(「共同食事」)。こうした私有財産の否定は、子供や女性の所有(女性の立場から逆に見ると男性の所有)ということにまで及ぶ。

プラトンは非常に端的に次のようにいっている。

「これらの女たちのすべて(守護者の妻女たち)は、これらの男たちすべての共有であり、誰か一人の女が一人の男と私的に同棲することは、いかなる者もこれをしてはならないこと。さらに子供たちもまた共有されるべきであり、親が自分の子を知ること、子が自分の親を知ること許されないこと。」(『国家』457D)

このようにプラトンは守護者層という国家の一部のエリートに対してではあるが、家族を伴った私生活と子どもの私的養育を端的に否定する。あくまでも守護者は国家全体の利益のために奉公しなければならない。プラトンに対しては、20 世紀イギリスの哲学者バートランド・ラッ

セルが「全体主義の擁護者」と形容するなど痛烈に批判したことはよく知られているが(ラッセル『西洋哲学史1』13章), もしもプラトンの意図や思想的課題を当面脇に置くことが許されるならば, そして専ら現代的観点から断ずることが許されるならば, 『国家』における守護者層の政治生活についての記述を読む時, プラトンの思想に全体主義的性質があることを否定できない。しかも専ら政治指導者の再生産を目的として行われる生殖は, 「互いにけじめもなく交わる」ことは許されない。できるだけ優秀な子供が生まれてくるような交わり方をしなければならない。具体的には, もっとも優れた男はもっとも優れた女とできるだけしばしば交わらなければならない, もっとも劣った男や女はその逆でなければならない。優れたカップルから産まれた子供は育て, 劣ったカップルから生まれた子供は育ててはいけないという。

一点注意すべきは, こうした国家における共有制論(共産主義論)つまり家庭生活を否定し, 子どもを国家の財産として育てるという発想が, 実は実在のスパルタにそのモデルが取られていたらしいということである。当時スパルタでは, 夫婦はともに生活することを禁じられ, 子供は, 生まれると国家によって検査された後, もしも劣等あるいは虚弱と判断されれば「タイゲトス山麓」の穴の中に投げ込まれたという。そして選ばれた者だけが, 7歳になると国家の養育所に入れられて, 少年隊に編入され共同生活の下で厳しく訓練されていた(プルタルコス『英雄伝』『リュクルゴス』16-17)。プラトンはこういうスパルタの制度を, 自分の理想とする国家のモデルにした。ペロポネソス戦争に負けたアテナイの荒廃を, 勝者スパルタをモデルにして復興させようという考えは, それ自体としては非常に納得がいく考えである。

哲人政治と哲人教育

プラトンは両性間における同一の職業と教育, 子どもの共有を「大浪」と表現することで, 自分の理想が極めて特異であることを認めているが, 彼自身もっとも常識外れの提案と考えているのが哲学者による政治, 哲人政治である。プラトンはこの哲人政治の実現可能性に考察を及ぼしている。そして「言葉で語られたとおりの事柄」と「そのまま行為のうちに実現される事柄」との一致の困難さを認めながらも(『国家』473A), どのようにすれば言葉で語られた事柄にできるだけ近い統治が得られるかを発見することで, その実現可能性を担保しようとするのである。このことは哲人教育を『国家』の中で提案し, アカデメイアで実践していることに裏付けられるだろう。

「哲学者たちが国々において王となって統治するのではない限り…あるいは現在王と呼ばれ, 権力者と呼ばれている人たちが, 真実にかつ十分に哲学するのではない限り, すなわち, 政治的権力と哲学的精神とが一体化されて, 多くの人々の素質が, 現在のようにこの二つの方向へ別々に進むのを強制的に禁止されているのではない限り, 親愛なるグラウコンよ, 国々にとって不幸のやむときはないし, また人類にとっても同様だと僕は思う。」(『国家』473D)

先の『第七書簡』にも見られる政治的権力と哲学的精神の一体化, これが哲人政治を担う人の条件だが, この哲学的精神とは, 恒常不変のあり方を保つもの, つまりアイデアを認識し, 把握することができる精神のことである。プラトンはアイデアを認識し, 把握できる者が政治を担うべきだと考える。

しかも上述の通り, プラトンは哲人を教育するカリキュラムすなわち「魂の向けかえ」とイデア

アへの「上昇」を大まじめに論じている。そもそも養成される哲人の適性として、知的にも体力的にも苦勞を厭わないことが要求される。性格的には眞實を好み嘘を嫌い、節制を身につけ勇氣も備えていることである。

アイデアは美のアイデアとか正義のアイデアとか様々であるが、政治指導者が認識すべきもっとも重要なアイデアは、善のアイデアである。なぜ善のアイデアがもっとも重要であるかについてプラトンは次のように述べている。

「しかしどうだろう、この点は明らかとはいえないだろうか？ すなわち、正しいことや美しいこと（見ばえのよいこと）の場合は、そう思われるものを選ぶ人が多く、たとえ実際にはそうでなくても、とにかくそう思われることを行い、そう思われるものを所有し、人からそう思われさえすればよいとする人々が多いだろう。しかし善いものとなると、もはや誰ひとりとして、自分の所有するものがただそう思われているというだけでは満足できないのであって、実際にそうであるものを求め、たんなる思われ（評判）は、この場合にはもう誰もその価値を認めないのではないか。」（『国家』505D、傍点は邦訳に記載のとおり）

政治指導者は、単に正しいと思われたり見ばえがよかったりするのではなくて、何が正しいか、何が美しいかを示す必要がある。しかし、もしも彼らがいかなる点において、正しい事柄や美しい事柄が善いのか分からないのであれば、そのような人々は政治指導者として価値の高い人々とはいえない。善のアイデアとは、いわば、眞に正しいもの、眞に美しいものを見極める根本的な力であり、プラトンはこれを「知識と眞理の原因（根拠）」であると明言している（『国家』508E）。

こうした善のアイデアを把握することによって理想国家を実現することを目的として、守護者の子どもに教育が施される。子供の少年時代には、まず音楽（歌、リズム、曲調）、文芸特に詩、物語、劇の研究そして体育とが教育され、その中から選ばれた者が、20 歳から 30 歳までに数学的諸学科（数と計算、平面幾何、立体幾何、天文学、音楽理論）を教えられ、さらに選ばれた者が 35 歳まで 5 年間「言論の修練」すなわち哲学的訓練を施される。プラトンは若者があまりにも若いうちに討論の仕方を身につけると、面白半分にそれを濫用し、議論のために議論する人をまねることで、自分の討論の相手を論じ倒して悦ぶという（『国家』539A-E）、決して好ましくない性癖に陥ることを懸念しているのである。その後、15 年間公務に従事し、もっとも優れた者が 50 歳以降、政治指導者として統治に当たるとされている。つまり 40 年以上かけないと本当の意味でのエリートは育たないと考えている。

「そして 50 歳になったならば、ここまで身を全うし抜いて、実地の仕事においても知識においても、すべてにわたってあらゆる点で最も優秀であった者たちを、いよいよ最後の目標へと導いて行かなければならない。それはつまり、これらの人々をして、魂の眼光を上方に向けさせて、すべてのものに光を与えているかのものを、直接しっかりと注視させるということだ。そして彼らがそのようにして、「善」そのものを見て取ったならば、その善を範型（模範）として用いながら、各人が順番に国家と個々人と自分自身とを秩序づける仕事のうちに、残りの生涯を過ごすように強制しなければならない。すなわち彼らは、大部分の期間は哲学することに過ごししながら、しかし順番が来たならば、各人が交替に国の政治の仕事に苦勞を捧げ、国家のために支配の任につかなければならないのだ。」（『国家』540A-540B）

作品『国家』の末尾には、冥界を訪れた後に蘇生したという「エルの物語」が論じられており、魂は不死であって、人間は自由意志と運の巡り合わせとによって生まれ変わりの生涯の選択を行

うという。すでに触れたように魂の不死はプラトンの著作において繰り返し強調されている問題である。そしてこれも上述したように、プラトンにとって魂の不死はアイデアおよび想起と不可分の関係にある。そのことを踏まえると、プラトンがアカデメイアで若者を集めて訓練を行っていたのは、魂の不死を前提として、正義や善などのさまざまなアイデアを想起して、それに基づいて国家の統治の任に当たる政治指導者を育成するためだったと考えられるのである。

国家の墮落のメカニズム

プラトンが描いた理想国家は、統治者が単独であるか複数であるかによって、与えられる名称が異なる。単独の統治者の国制は「王政」、複数の国制は「優秀者支配」であり、いずれも最も優れた者たちの支配する国家であって、国家の欲望的、気概的、理性的部分が均衡を保ち、節制、勇気、知恵によって調和が保たれた状態にある。ところが現実のギリシアのポリスに目を転じた時、プラトンはそれがいかに多様だったかを強調する。しかもそうした現実の国制は本来あるべき調和均衡を失うことで、そこから逸脱することに気づいた。プラトンはその逸脱した国制として、名誉支配制、寡頭政、民主政、僭主独裁制と4つあげている。これら4つの逸脱形態は本来あるべき状態からこの順番に墮落し、最後に僭主独裁制へと至る。

第一の「名誉支配制」は軍人支配であって、気概的部分が理性的部分をしのいで支配が粗暴になり、哲学が軽んじられる。次に寡頭政は国家全体の中で人口の少ない富者の支配が行われ、数の多い貧者が抑圧される国制である。プラトンによれば、富裕な階層が富をあくまでも追求し、自分たちに都合の良いように金の使い道を見つけ、法を曲げるといふ。後世、富と徳との対立が思想家の間で意識されるが、プラトンは両者の対立関係をいち早く見抜いていた。民主政はこの逆で、墮落しきった富裕な階層を貧者が打ち倒して支配するようになる国制である。これは不必要な欲望が解放される非常に悪い国制と考えられている。そしてこの民主政が極端にまで押し進められると無秩序状態から僭主独裁制が生まれてくる。

プラトンは、「最高度の自由」を享受する国制であるところの民主政からのみ、「最も野蛮な最高度の隷属」状態としての僭主独裁制が生まれると断言している（『国家』564A）。民主政において自由の追求が過度に行われた結果、支配者と被支配者との、父親と子どもとの、市民と外国からの居留民との、年長者と若者との、教師と生徒との、それぞれの区別が平等化されることで無政府状態がもたらされるのだという。つまりそれまで上位の立場にいた者が下位の者に「面白くない人間だとか権威主義者だとか思われないうために」（『国家』553A）、下位の者のご機嫌を取り、彼らに迎合するようになる。

プラトンによれば、一般に数の多い貧者すなわち民衆の習性として、誰か一人の人間を自分たちの先頭に押し立てて指導者とする。そうした指導者のうち、たとえ怠け者で浪費家であったとしても、最も弁舌巧みに人々を扇動する者が、「持てる階層」から財産を取りあげて民衆に分配する。そして自分の地位を保つために常に戦争に訴え続け、そのことで自分の敵となる真に勇気ある人、高邁な精神を持つ人、思慮ある人などに対して陰謀を働くようになる（『国家』565C-567C）。プラトンはこのような僭主独裁制の国家を、理想的な哲人政治と正反対の国家と見て、最悪の国家であると考えた。この最も避けるべき僭主独裁制にならないようにするためには、哲人政治に基づいた国家を建設しなければならないというのが、『国家』におけるプラトンの処方箋であろう。とすれば、民主政の下でソクラテスを処刑したアテナイが、僭主独裁制に陥るのを

回避すべく、解決の道を示そうとしたのが『国家』という著作だったと考えられるのである。

[引用参考文献]

プラトンの著作からの引用は岩波文庫版『メノン』（藤沢令夫訳）、同『パイドン』（岩田靖夫訳）、同『パイドロス』（藤沢令夫訳）、同『国家』（藤沢令夫訳）から、『第七書簡』については岩波書店『プラトン全集 14』所収の長坂公一訳による。

廣川洋一『プラトンの学園アカデメイア』、岩波書店、1980 年
モンテスキュー『法の精神』（上）、野田良之他訳、岩波文庫、1989 年
ラッセル『西洋哲学史』1～3、市井三郎訳、みすず書房、1970 年
ヘロドトス『歴史』（上）～（下）、松平千秋訳、岩波文庫、1971 年、1972 年
ホワイットヘッド『過程と実在』（上）（下）、山本誠作訳、松籟社、1984、1985 年
ブルタルコス『英雄伝』（上）～（下）、村川堅太郎訳、ちくま文庫、1987 年
周藤芳幸、村田奈々子『ギリシアを知る事典』、東京堂出版、2000 年
ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』（上）～（下）、加来彰俊訳、岩波文庫、1984 年、1989 年、1994 年
福田歓一『政治学史』、東京大学出版会、1985 年

[付記]

本稿の作成にあたり、栗林広明教授から貴重なご教示を賜った。記して謝意を表したい。なお本稿の記述の責任は全て筆者に属する。